審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　斉藤　理

本学位請求論文は，19 世紀ドイツ建築におけるポリクロミーの変容過程とその特質を，シンケルの試みを出発点とし，1830 年代から 1870 年代にかけてのベルリン派の動向と重ね合わせ，具体的な図版の分析を通じて明らかにするものである．

なお，研究にあたっては，ベルリン美術図書館を初めとする 7 機関の資料を 1 年半の歳月をかけて閲覧を行っている．

本論文は，本論 7 章と本人が撮影した約 500 枚のオリジナルの図版の複製からなる付属図版資料集に加えて装飾見本帳を扱った別章 1 章から構成される．

第 1 章は，序にあたるものであり，ポリクロミー建築をめぐる研究史を概観し，本論文での 3 つの分析視点を提示している．第 1 は 19 世紀ドイツにおけるポリクロミーの受容と実践過程を明らかにすること．第 2 にポリクロミーの問題を作家性に帰するのではなく，時代的考察を踏まえながら多面的に分析・把握すること．第 3 に細部装飾とポリクロミーの関係性の検証である．

第 2 章では，シンケルの建築作品に見られる色彩性を検証し，その特色と意義について論じている．その結果，1）シンケルは，ポンペイ装飾，ラファエロを範としたルネサンス装飾，ヘレニズム装飾を参照するものの，それを直写するのではなく，独自の色彩的感性に基づいて作品化させていること，2）ポリクロミーに関してパターンブックの使用に関心を寄せていたこと，3）彼が見本帳の編集にもかかわり，これを創作活動の源泉とする設計手法を開拓したことを明らかにしている．

第 3 章は，論文提出者が「シンケル派第 1 世代」と呼ぶシンケルの第 1 後継世代であるシュテューラーとシュトラックを取り上げ，彼らの彩色図版，月例設計競技作品，『建築スケッチブック』等の図面を分析している．その結果，シンケルの「古代ギリシア的ルネサンス」という多彩色装飾の特色を継承しつつ，異なる様式をも一建築作品に色彩的に融合させていく試みがなされたことを実証している．

第 4 章ではシュテューラーやシュトラックと同世代であるベッティヒャーを取り上げている．そこでは，ベッティヒャーが自ら編纂した色彩装飾の見本帳，自著『古代ギリシア人の構築術』，建築アカデミーでの色彩装飾演習が分析されている．その結果，1）彼が構築した色彩装飾体系の内容，2）その体系がテクトニックと色彩装飾を密接に関連付けるあらたな色彩装飾の基盤を構築したこと，3）これに基づいた当時の彩色教育の実態が明らかにされている．また，彼による理論的基盤の確立が，他方でその色彩選択の感覚的自由度を制限するという指摘は，以降のポリクロミーの進展理解に重要な視座を与えるものである．

第 5 章では，論文提出者が「シンケル派第 2 世代」と呼ぶ，「シンケル派第 1 世代」に続く建築家の一人であるグロピウスの創作活動が分析された．その結果，ベッティヒャーのテクトニック論に基づくポリクロミーとシンケルの多彩色が共存しながら多様性を模索する方向へ展開していることが明らかにされた．また，彼が記したポリクロミー論の解読から，「色彩装飾の独立」，「調和の問題」，「有機性の創出」が希求されていたことを明らか

にしている．

第 6 章では，「シンケル派第 2 世代」であるコルシャーとルーカエが取り上げられている．その結果，コルシャーが，「シンケル派第 1 世代」と次第に剥離し，色彩独自の論理性に基づく新たな彩色法を模索する過程を跡付けることに成功している．更に，ルーカエの論文「建築空間の 4 つの効力」を解読し，建築事例と照合することで，ルーカエが色彩装飾の問題を 3 次元空間との関連で展開させたことを明らかにしている．

第 7 章は，結論に相当する．そこでは，ポリクロミーの受容と実践過程の流れを，シンケルを経て，「シンケル派第 1 世代」では，ベッティヒャーが提示した「ポリクロミーの文法化」に沿って彩色法が規定される一方で，「シンケル派第 2 世代」に至って，創造性を求める方向に変異すると総括している．また，ポリクロミーの多面的な特質に関しては，シンケルの有機性を継承した「シンケル派第 1 世代」，「シンケル派第 2 世代」の動きが，最終的にルーカエにおいて「創作者」から「鑑賞者」の視点へと拡大され，新たな思潮上の特質を持つに至ったと総括する．更に，細部装飾との関連について，彩色図面や装飾見本帳に見られる細部装飾の多様性がその創造性の証左であるとし，これまでの創造性に乏しい低迷期の現象として描き出されてきたこの時代の動向に対する見解に異を唱えている．

別章では，装飾見本帳を取り上げ，その変容過程，種別，用途について論じている．その結果，19 世紀の見本帳が，地域的にも時間的にも隔たりのある建築物の色彩性を記録，伝達する媒体から，次第に新たな創作を喚起し，多方面に応用できる実用性が重視されるように変容する過程を明らかにしている．

以上，本論文が明らかにした，シンケルを経て「シンケル派第 1 世代」におけるベッティヒャーの理論的基盤の確立，引き続く，「シンケル派第 2 世代」における創造性への変異，およびその思潮上の特質，さらには細部装飾の多様性に見る創造性の発露は，これまでの 19 世紀ドイツ建築に関する見解に新たな建築史的視座を提示する優れた業績といえる．

よって，本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格として認められる．